

# A Harvest of Fear

by Steven M. Greer M.D.

1992

## UFO ヒステリー，恐怖の産物

スティーブン・M・グリア 医師

1992 年

( [SiriusDisclosure のウェブサイトより](#) )

真実の追求には、物事の外見を超えて現れの背後にある意味と本質を見抜く能力が必要である。不可解さ、部分情報、誤報、および手の込んだ偽情報に悩まされている UFO 研究ほど、この能力が重要な調査研究分野はない。そして悲しいかな、UFO 研究ほど、まさにこの能力の欠如が見られる分野もないのである。

たとえば、現在の風潮を見よ。そこではあらゆる流言、空想、目撃が偏った方向に解釈され、悪意を持って人心を操作する 'エイリアン' という先入観の枠組みにはめ込まれる。誘拐から動物 '切断'、米軍基地における秘密活動まで、すべてが '悪意を持つエイリアン' の鑄型の中で記述される。暗黙のことであっても蔓延するこれらの現状は、現実であれ空想であれ、そのような出来事のすべてを暗く恐ろしい闇の中に追いやるものである。この社会通念、この非公式の路線から離脱することは、何しろ一番よく知っている自称専門家たちの冷笑を受けることを意味する。

UFO ヒステリーの振り子は、その周期を完全に振れ切ったように思える：もし 1950 年代が美しい金星人、宇宙の神々、銀河連邦からやってきた救済者たちの時代だったなら、この 10 年間は明らかに非道な目的のために母親、子供を同じように寝室から連れ去り、牛、猫、犬、そして胎児さえをも捕獲する邪悪な 'エイリアン' の時代、地球支配の計画において軍事ファシストと 'エイリアン' が共同する時代に我々を連れていったのだ！自らを客観的な UFO '誘拐' 事件の研究者、UFO ジャーナリスト、作家だと主張する人々の大部分は、このヒステリー、この恐怖の産物に飲み込まれているのである。

誠意を持って 'ただ事実を述べる' ことを意図する人々でさえ、恐怖、否定的思考、ヒステリーが支配する文化的環境に影響されている。被害者、誘拐された、エイリアン、切断、レイプ、悪意のある、不穏な、警戒すべき、騙し、制御、人心を操作する、邪悪な、等々の言葉が、義務的かつ無条件の UFO 用語として無意識のうちに受け入れられる。無意識の解釈と深い分析の欠如が多く見られ、それが我々にほとんど疑う余地のない - したがって揺るぎない - 結論を残す。それは押しなべて否定的な結論である。客観的立場で事実を収集し、動向を分析し、将来の研究および UFO-人間相互関係のための合理的計画を立案するどころか、ますます強力な恐怖の産物を生み出すヒステリー機構が存在するのである。この恐怖と否定性のパラダイム

に適合しない事実は無視されるか、'エイリアン'の隠蔽記憶、騙しとして意図的に暴かれる。

このすべての本当の被害者は誰か：もちろん、'真実'である。

現在の UFO 界に威力を振るうヒステリーのざわめき、恐怖の群れに囲まれて真実を見分けることは難しい。この環境の中であって出来事は誤解されやすく、非難を受けることさえある。ようやく損なわれずに生き延びた事実も、恐怖と偏執症の色合いを帯びて提示される。このすべてにある危険性とは、我々が持続させる風潮により、最初はそれが嘘であってもそれ自身の現実 - そしてそれが原因の将来の紛争 - がつくり出されるかもしれないということである。我々はこの問題に真剣に向き合い、深く考えなければならない。そうしないと、人類全体のみならず、個々の UFO 現象目撃者にとっても、重大で破滅的な結末がもたらされる可能性がある。確かに、我々の現実是我々自身がつくるのである。だから、その現実がどのようなものになるのか、我々はよく考えなければならない。

今述べた、抽象的ではないが大まかな懸念の向こう側には、このヒステリーのすべてが多くての罪なき UFO 現象目撃者に影響を与えている、より差し迫った倫理上の問題がある。信頼が、無意識的ではないにせよ絶えず歪められ続けているという事実はさておき、UFO およびその搭乗者たちと緊密な相互作用を経験した人々（すなわち '誘拐被害者' および 'コンタクティー'）は、彼らの遭遇の肯定的、啓発的側面を否定し、その経験の恐ろしい否定的側面にのみこだわり続けることを、時には冷酷さをもって強要される。これはよくあることなのか？ きわめてよくあることなのだ！ 我々がインタビューをした何人かの人々は、いわゆる '誘拐研究者' たちが、ある種の否定的で恐怖を引き起こすような解釈を強要したばかりか、先入観となっている '恐怖のパラダイム' に合わない側面を '投げ捨てる' ことまでしたと明言した。すなわち、ET（地球外知性体）たちとの肯定的な、愛情と癒しと啓発に満ちた経験は無視されるか、そうでなければ ET のより邪悪な騙しの一部にすぎない隠蔽記憶と見なされる。客観的に言えば、偏見のない寛容さと真実は取り除かれ、これらの経験が、（暗黙のことにせよ）予め用意された否定的結論の枠組みにはめ込まれるのである。一方でこれらの研究者たちは、彼らの主題の信頼性と真実性を立証するために、あらゆることをする。しかし結局のところ、彼らは真実に背き、自分たちのパラダイムに合わない経験の側面を無視するか、積極的に暴露するだけである。

もし我々がこれらの事例の事実を選び好みするならば、むしろその否定的な経験が個人の恐怖と不安により引き起こされた '隠蔽記憶' であり、啓発的で崇高な記憶が '真実' であると強く主張しないでよいのか？ もし我々が事実を選び好みするならば、幸福になる側を取ったらどうなのだ？ 実際には、一方の選択肢は他方のそれと同様に、真実味を欠いた危険なものである。だから、これらのどちらも除外されるべきである。何よりも必要なことは、我々がすべての事実を受け入れ - また報告し - それから静かに落ち着いて、それらの意味を分析することである。我々がこれまでに収集した情報と経験を総合するならば、ET たちが邪悪な宇宙の征服者ダース・ベイダーであると宣言することも、彼らが完全なる宇宙の神々であると主張することもできないのである。この問題について我々が分裂している状況は、蔓延する不毛な集

団ヒステリーの主要な兆候である。だから、我々が直面している最大の課題は、このヒステリーを消滅させ、我々自身の恐怖を克服することなのである。

スティーブン・M・グリア著：'Extraterrestrial Contact: The Evidence and Implications (異星人コンタクト：証拠と意味)' より

(訳： 廣瀬 保雄)